

新出の『揆穴輯要』について

加畑 聡子, 星野 卓之, 花輪 壽彦

北里大学東洋医学総合研究所医史学研究所

【緒言】

幕府医官・多紀元簡（1755–1810, 号は桂山, 別号に櫟窓）は, 父多紀元恵（1732–1801）に医を, 井上金峨に漢学を学び, 古医書の収集, 校訂, 復刻につとめ, 江戸時代における考証学の基礎を固めて発展させたことで知られている. 著作には, 『傷寒論輯義』『素問識』など数多くの漢方書が挙げられる. 中でも経穴書として『揆穴集説』（多紀元簡撰, 寛政3〔1791〕年写, 杏雨書屋所蔵, 京都大学図書館富士川文庫所蔵）がこれまで知られてきたが, 元簡の撰かつ孤本と見られる『揆穴輯要』（文化元〔1804〕年多紀元簡記, 文政元〔1818〕年に澁川維亮写, 北里大学東洋医学総合研究所所蔵）が新たに見出された. そこで本発表では, 江戸時代考証学派による経穴学について理解する手立てとすべく, 『揆穴輯要』を調査・検討した結果を報告する.

【方法】

多紀元簡の著述とみられる『揆穴輯要』に見える記載について整理し, 同著者による経穴書『揆穴集説』（杏雨書屋所蔵, 京都大学富士川文庫所蔵）ならびに, 江戸前中期の後世派・堀元厚（1686–1754, 名は貞忠, 号は北渚）撰『陰輪通攷』（延享元〔1744〕年序, 写本, 京都大学図書館富士川文庫所蔵）の内容と比較し, 考察する.

【結果及び考察】

『揆穴輯要』は43丁1冊の写本であり, 首には「澁川氏蔵書」蔵書印, 末には「文化甲子秋九月廿六日輟卷 多紀櫟窓老人燈下記」「文政元年夏六月廿六日写之 澁川維亮子欽」と奥書が記載されることから, 文化元（1804）年秋に多紀元簡（1754–1810）が記し, 文政元（1818）年に澁川維亮によって書写されたことがわかる. 旧蔵・書写者の澁川維亮の出自については未詳だが, 『医方大成』（明・熊彦明, 吉田宗恂解, 宮内庁書陵部所蔵）にみえる蔵書印には, 「澁川氏蔵書」と共に, 「多紀氏/蔵書印」「躋寿殿/書籍記」とあることから, 多紀家の蔵書を手にする機会を得られる立場にあった人物だと推測できる.

本書の内容は, 太陰肺経から任脈・督脈を含めた十四経脈に属する経穴位置や取穴法から始まり, 次に「奇兪」穴には「四花」「膏肓」「頭部二穴」「手部二穴」「背腹部二穴」「足部二穴」「腰眼」「脚気八処」と呼ばれる奇穴の経穴位置や取穴法, そして末には身体各部の長さの測定法を示す「尺寸法」が記載されている. 本文中に記載される引用書名には, 『鍼灸甲乙経』には「甲」, 『外台秘要方』には「外」など, 赤い四角で囲まれた頭文字で示され, 明瞭かつ端的に引用文が蒐集されている.

本書の内容について他書と比較すると, 『揆穴輯要』首に見える「手太陰肺経」の「雲門」「中府」の配列が, 『揆穴集説』では逆の順序になっていることを始め, 全文を通して一致は見られず, 『揆穴集説』とは異なる意図で編集されたと言える. そこで『陰輪通攷』の記載と比較したところ, 簡略化されているものの, 引用書や記載内容の大部分が一致していた. 一致しない箇所については, 原文に則して記述されるなど, 引用書に基づき修正加筆されていたことがわかる.

【結語】

『揆穴輯要』は, 『陰輪通攷』の内容を抜き書きしながら, 引用においては原文にあたって, より精確に記述されていた. 本書から, 後世派の業績を踏まえながらも, 古医書を基本としてより簡便な経穴書の著述を試みる, 江戸中期の考証学派による経穴学の考証の態様を窺うことができる.

※本研究は, JSPS 科研費 JP20K129053D の助成を受けたものである.